

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同研究プロジェクト「アジア・アフリカ地域におけるグローバル化の多元性に関する人類学的研究」2010年度第二回研究会 報告

2010年12月19日（日）13:00–18:00

場所：AA研マルチメディアセミナー室（306）

今回の研究会では、最終成果報告書の出版に向けての議論をメインの目的とした。床呂、三尾が全体の報告書の基本的な理念、方向性についての素案を提示し、共通理解を得るためのブレインストーミングに時間をかけた。次に、各メンバーがどのような内容の論文を執筆する予定であるのか、それぞれも構想の要旨を持ち寄って発表し、相互にコメントをつけた。

全体に関する素案に基づく討論で最も重点を置いて議論した点は、グローバリゼーションをどのように概念規定するか、という点であった。本プロジェクトで扱うグローバリゼーションは、ここ数十年の間に顕著になった所謂欧米中心の経済的論理を主軸とするグローバル化を相対化することである。即ち、従来のグローバリゼーションをめぐる議論が、非常に欧米中心主義的な暗黙の前提に依拠してきた点を批判し、これまでのグローバリゼーション概念に代わるような複数のグローバリゼーション概念を提起することを目指した。このため、たとえば「プライマリー・グローバリゼーション」（非欧米起源の、近代より以前から持続するトランスナショナルな人やモノ、文化のフロー）、「微細なグローバリゼーション」（西欧中心の枠組みとは異なる、ローカルな場から発生するものや人のフロー）といった概念の提起、また人の移動だけではなく、ノン・ヒューマンなもの（ある地域的な広がりをもった）な人、モノ、非人間的な（non-human）もの”フロー”にとりわけ注目する」というあたりを、ゆるい合意として、従来の人類学や関連分野でのグローバリゼーション論の枠組みに対して、また異なる理論的な新機軸を盛り込んだ内容となるように構想することとした。

全体討論の後、各メンバーが構想している個々人の報告書の内容について報告した。タイトルは、以下の通りである。なお、井上真悠子氏と大村敬一氏は、研究協力者だが、両氏が本研究プロジェクトの趣旨に賛同され、それにそった研究発表をしてくださったことから、執筆陣に加わっていただくこととなった。

新井和広 「変わる移住先、変わらぬ構造—ハドラマウトの「生き残り策」(当日は、紙上参加)

井上真悠子 「越境するみやげ物—現代アフリカ社会における観光業従事者の移動とみやげ用商品の流通」(当日は、紙上参加)

岩谷彩子 「ディアスポラを問い直す—ロマ/「ジプシー」が分有する起源と共同体の現在」

大村敬一 「真理の多元化に向けて:「イヌイトの知識」問題にみるテクノサイエンスと在来知」

奥島美夏 「インドネシア人の東アジア域内移動にみるイメージと言説の構築:弱者の戦略としての気質と容姿」(当日欠席)

木村自 「移民経験の語りとグローバリゼーション—移民たちはグローバルな人と情報のフローをいかに語るのか」

小松かおり 「バナナの多元的ローカリティとグローバリゼーション」

床呂郁哉 「もうひとつのグローバリゼーションとしてのイスラーム」または、「スール—海域世界における複数のグローバル化と、その絡み合い」

富沢寿勇 「グローバル化のなかのマレー・ディアスポラ運動」

錦田愛子 「パレスチナ人のグローバルな移動とナショナリズム」(紙上参加)

三尾裕子 「グローバリゼーションと中国系移民の多次元的关系性」